

共に舟で向岸にゆき、小川に架せたる辨天橋を渡つて小倉村の松原を寫した。休日とあつて小供が澤山よつて来る、パレットを見て「このインキがなくなつたらどうするベイ」と一人が云ふ、「窪澤で買ふだらう」と一人が答へる、彼等は百軒ばかりの小さな村を大都會と心得てゐる愛嬌のものである。

寫生の終りしころ、ST君とSO君が來た、今一步といふ處で汽車に乗りおくれたのだといふ、空は雲切れがして薄日がさして來た。

更に一枚のスケッチを得て松原を見捨てた、僕は明日大切な用事があるので東京へ歸らねばならぬ、時間は早いが一寸見廻はつてと思つて小川のはとりに來ると、今TA君が川へ落ちたといふ人がある、段々様子をきいて見ると、川の中の石を傳つて渉るつもりで二三歩踏出した時、大切の三脚を落した、三脚を流しては大變と、前後を顧みる暇もなく川へ飛込んだが、瀬の早い處を追廻したので殆ど全身水に濡れたといふ譯で、お茶屋へ乾しにゆくやら、それは、大騒動であつたげな。

再び渡船で窪澤に着いた、すぐ岸にJS君が寫生をしてゐる、小石の上に腰を下して窮屈そうにやつてゐる、きけば三脚の足を一本折つて仕舞つたのだといふ。崖を上つて見るとこゝには五六人集つてゐる、一番先のHO君も、犬の糞の諸處にある枯草の上に座つて描いてゐる、また三脚を折つたのかと思つて見ると、三脚の革の上に大きな石を一つ乗せて自分の前に据へてゐる、何の兎だか知らぬ。

三時半窪澤を出發した、僕と共に歸る人はNM君とSO君とである、相原の停車場へ來たが、汽車延着で五時半迄待たされた寒いプラツトホームで皆々震へ上つて仕舞つた。

八王子でも一時間の延着とあつて散々待たされた、銘々辨當を一つ宛持つて漸く車室に乗込んだ、こゝでツメたいノ、マヅいやうな旨い辨當を食つた、旨いといふは非常の空腹であつたからで、其實随分憐れな辨當である。

汽車の中は恰も楓の樹の下に居るやうで、高尾歸りの人々の持つて來た紅葉で天井も見えぬ程である。薄暗い車燈はいよゝゝ暗く、それに延着のため、何處の停車場でも下りの汽車を待合はすので、其不愉快さは一通りではない、ア、窪澤の連中は、今頃はさぞ面白く騒いでゐるだらうと思ふと、無理にも今夜は泊まつて來ればよかつたにと後悔の念も起つた。

終に二時間ばかりの延着で、それでも新宿に着いて、電車で家へ歸つたのは正に十時、風呂に入つて漸く人心地になつた。

二十三、四兩日の記事及、この日の洩れたる出來事はSN君とSY君の擔當で次號に御報告いたします。

紹介

◎方寸展覽會號には鋭利痛快なる論説及批評あり、公設展覽會出品畫の寫眞も數葉あり（一部十二錢本郷區駒込千駄木町方寸社）